



岡崎市中央図書館 大量アクセス 事件

図書館の利用者が、ホームページに集中的にアクセスして閲覧しにくくしたとして偽計業務妨害の疑いで拘留、取り締まりを受けた事件である。

事件のあらまし

- 利用者は、図書館の新着図書情報を得るために、自動でデータを得るプログラミングを開発、実行したが、図書館のシステムのもろさにより、サービスが停止することが多発した。そのため図書館が攻撃を受けていると思い、被害届を出した。このプログラミングは、1秒に1回アクセスできるものだったが、図書館側は人による利用のみを想定していたため、システムがダウンしてしまった。このシステムを開発したのは三菱電機インフォメーションシステム株式会社であり、このシステムの脆弱性を把握して、ソフトの改修を行っていたが、この図書館に納入されたのは改修前のものだった。



事件の教訓

- この事件の問題点は、一時的とはいえ利用者が身体的自由をうばわれたこと、図書館側のシステムに対する知識の低さ、システムを提供した企業の不注意などが挙げられているが、特に大きな点として、技術者への影響が挙げられる。これは、今回用いられたプログラミングが技術を持つ人にとってはそこまで難しいものではないにもかかわらず、それによって逮捕が起きたことによる技術者側への心理的恐怖や恐れが生じることである。公共機関の利用で同様のことが起きるリスクがあるので、何か問題が起きたときに警察に頼るのみではない解決方法を模索することが重要である。

